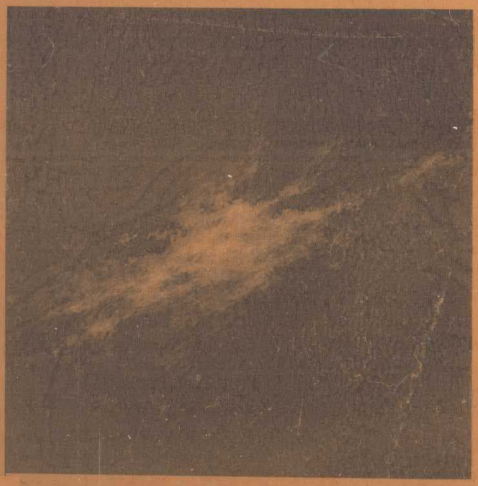
空洞の怨恨



怨恨

森村誠一

作品発表誌

二重死肉　小説現代　50年3月号
鈴蘭の死臭　小説現代　50年2月号
集合囚音　別冊小説新潮　50年冬季号
密閉島　別冊小説現代　'72年初夏号
崩落した不倫　小説宝石　50年1月号
空洞の怨恨　小説現代　49年12月号

空洞の怨恨

第1刷発行　昭和50年4月20日

著　者　森村誠一
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽2－12－21
電話　東京(03)945－1111(大代表)
振替　東京3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 1975 SEIICHI MORIMURA

定価はカバーに表示してあります。（文2）

目次

二重死肉　5
鈴蘭の死臭　49
集合凶音　89
密閉島　141
崩落した不倫　199
空洞の怨恨　235

装幀　居島　春生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

空洞の怨恨

二重死肉

1

有田修は、ねずみに対して異常な嫌悪感をもっている。だれでもねずみは嫌いであるが、彼の場合はそれがはなはだしい。その嫌悪が高じて、ねずみ捕りを職業とするようになった。

ねずみは、彼の人生の方向を変えたのである。

実際、ねずみくらい人間に害を及ぼす動物はないだろう。野ねずみは、樹木、植林、各種農作物、家禽類をあたるをさいわい食い荒らす。どぶねずみを中心勢力とする家ねずみは人家に侵入して、食料、残飯を食い荒らし、家具を齧る。とにかく一日に体重の四分の一から三分の一食わなければ、生命を維持できない。

しかもねずみの害は、食害だけではない。真に恐ろしいのは、各種伝染病の媒体となって、いたる所に恐ろしい病原菌をばら撒くことである。ねずみが媒介する可能性のある病気は二十種以上あると言われる。その主なものは、ペスト、ワイル病、サルモネラ食中毒、ツツガムシ病、腺熱、鼠咬症、発疹熱、リケッチア痘瘡などである。

直接、ねずみが人間に移す病気もあれば、ノミやダニ、あるいは食物、水などを経て伝染する場合もある。ねずみは、まさに伝染病の動く巣である。

さらにねずみの繁殖率たるや戦慄的なものがある。野ねずみの中のハタネズミを例にとれば、繁

殖期は春秋の二期ある。一匹平均一回に四匹の子を産む。妊娠期間は二十一日。出産したその日に交尾して、次の胎児を孕(はら)む。

生まれた子ねずみは半月ほどで独立して親許から離れる。母ねずみは前回に産んだ子が独立して五、六日後には、次の子（平均四匹）をまた産み落とす。このように春秋の繁殖期には、一匹が三、四回反復して出産すると考えられている。

子ねずみの成長も速い。生後五十日も経つとすでに性的に成熟して、繁殖可能な状態に達する。一番(ひとつがい)のハタネズミから一年間に八十五匹に増やした例もある。これが新記録であるとしても、平均五、六十匹、二十～三十倍には増える。最初の一対のねずみが一年間に十七回出産、八十五匹を産み、生まれた子ねずみが同じ率で繁殖の戦列に加わったとすれば、農林省林業試験場鳥獣第一研究室長宇田川龍男氏の資料によると、一年間の繁殖累計は、九千三百六十四匹となる。

まさに「ねずみ算」の語源となった凄じい繁殖率である。全身、食欲と性欲のかたまりといってよい。

有田は、このねずみを自分の生涯の怨敵に据(す)えていた。彼はこの怨敵と生涯かけて戦うために「ねずみ捕り会社」を設立した。彼が開発した人畜無害で、ねずみだけに効果を発揮する新殺鼠剤『ラトール』は、評判がよく、彼の会社は好調をつづけている。

その意味では、ねずみは彼の生活の基礎であり、成功をもたらした〝恩人〟とも言える。

だが、彼がこの道に転向したのは、ねずみによって彼のささやかな家庭を滅ぼされたのがきっかけになっている。

あれはまさに悪夢の記憶だった。有田はいまもって、あの事件が現実に発生したこととは信じら

れないおもいであった。悪夢がいまだにつづいていて、ある日突然夢から醒めると、彼のささやかなしあわせに満ちた家庭は、あのころとまったく同じままによみがえるような気がしてならなかった。

当時、――いまから三年前、有田は神田辺の中所の薬種会社に勤めていた。妻の美知子は会社のタイピストだった。職場結婚をして、一年ほど共稼ぎをしていたが、長女の梢が生まれたので、社を辞めた。

美知子は、その社だけでなく、界隈で評判の美人だった。理知的な美貌に現代的な愛くるしさがある。男たちは好みに関わりなく、一様に熱っぽいまなざしで彼女を見た。

勤めていた会社だけではなく、よその会社の男の社員からも猛烈にアプローチされたらしい。彼女を勤め先まで尾けて来る男たちも、少なからずあった。――彼女をよその男から守る会――のようなものまでが、勤め先の男子社員によって結成されるほどであった。

それら大勢の競争者を押しのけて、彼女のハートを有田は射止めたのである。有田は、特に男性的魅力に恵まれているほうではない。背丈も低いほうだし、体格も貧弱である。容貌も平凡で、会社の中で特別な才能を認められていたわけでもない。

学歴も高校卒である。父親は貧しい地方公務員で、親戚からも際立った人物は出ていない。要するになにからなにまで平凡である。サラブレッド的要素はなに一つない。

キャンセル待ちのウェイティングリストの末端に申し込むように、おずおずと近づいて行ったところ、意外にも美知子は彼に最も強い反応を見せた。

有田は最初からかわれているのかとおもった。数多い颯爽たるライバルたちの中からなに一つ目

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

立った所のない自分を、彼女が選ぼうなどとは、夢にも期待していなかったからである。
それでもいちおう近づいてみたのは、外れてもともとという、宝くじでも買うような意識からだった。それが意外にも、美知子は有田に反応した。からかっている様子はなかった。彼女は真剣に反応したのである。
有田は、有頂天になった。そして彼女の気の変らないうちにと、「慌てて」結婚した。
多くの競争者たちはあっけに取られた。有田は、まったく下馬評にも上っていなかったのである。駄馬にゴールをさらわれた有力馬のおもむきがあった。
後で美知子は有田に語った。
「あなたには他のだれにもないひたすらな誠実みがあるの。人生は格好だけでは生きていけないわ。私はあなたの誠実にかけることにしたのよ」
彼らの結婚生活は幸福そのものであった。有田は、美知子が見込んだとおり、誠実な夫だった。妻がすべての女性を代表し、それで満足していた。
世の男どもが浮気をするのは、すべての女性を代表し得る妻に当たらないからである。妻以上の女性がいなければ、浮気など馬鹿らしくてできないはずだ——と有田はおもった。
美知子と結婚したことで、会社の幹部たちの有田を見る目が変った。徐々に重要な部署に登用されるようになった。これまで平凡な見かけに隠されていた彼独特の粘りと誠実みが、仕事にあらわれて、ますますいい仕事をするようになった。彼は妻によって、隠れていた才能を醒まされた形になった。結婚して一年後に子供が生まれた。美知子によく似た可愛いらしい女の児だった。
このころが、有田の人生の最も幸福な時期であった。仕事も順調だし、家に帰れば美しく優しい

妻と生まれたばかりの可愛いいわが子が待っている。ささやかであったが、かけ替えのないしあわせが、彼の身を取り巻いていた。

幸福というものは、主観的なものである。その意味で、彼は世界中のしあわせを一身に集約しているような気がした。

そのしあわせをある日根本から覆(くつがえ)したのが、あの憎むべきねずみだったのである。

2

そのころ有田の一家は東京近郊のある私鉄沿線の小さな借家に住んでいた。古い木造建物であったが、狭いながらも庭があり、日当たりがよく、住み心地がよかった。家賃も安い。都心までの通勤にやや不便な点さえがまんすれば、まずは彼クラスのサラリーマンの望み得る格好の住居であった。

あの呪われた日、美知子は夕食の買い出しに近くの商店街に出た。いつもならば、生後四ヵ月になる梢(こずえ)を乳母車に乗せて連れていくのであるが、母親から母乳とミルクをたっぷりもらって、さも快げに眠っているのを起こすのに忍びなく、美知子は一人で出かけて行った。

ほんのわずかな時間であるし、乳児を夕食前の買出しでごったがえしている市場になるべく連れていきたくないとおもったのが、不運であった。

火やガスの元栓をよく確かめ、錠をしっかりと下ろして、彼女は買い出しに出かけて行った。留守中目が覚めても危険はないようにしておいたつもりである。それに梢は健康な子で、あきれるほどよく眠った。いったん眠り込んだら、そばで少々大きな音をたてても目を覚まさない。

美知子は安心して出かけた。買い物をすませて帰って来たとき、彼女は瞬間的に異変を悟った。一見、出て行ったときと、なんの変化もない。だが母親としての本能が、留守中、確実になにかの異変が起きたのを、空気の中に感じ取った。

「梢ちゃん！」

美知子は、買い出した品物を玄関先に放り出して、奥の部屋のサークルの中に眠っているわが子の所へ駆け寄った。拳大の黒点が、サークルから四方へ飛び散った。美知子は、胸を鋭い刃物で突かれたような痛みをおぼえた。ズンと心臓を断ち割られたような痛覚であった。

サークルになにかが侵入して、美知子の足音に驚いて逃げ散ったのだ。黒点の正体を見届ける余裕はなかった。次の瞬間、彼女の目に飛び込んできたのは、血だらけになった梢の無惨な姿だった。

「梢ちゃん！」

美知子は悲鳴をあげて、わが子を抱き上げた。目と鼻と口から血が噴き出していた。貝がらのようだった可愛いらしい耳たぶが、鋭い刃物に切り裂かれたようにぶらぶらになっている。赤ん坊は、すでに虫の息になっていた。泣く声も出ないほどに弱っている。

「こんなひどいことを、だれ、だれなの!?」

美知子は、自らもわが子の血を浴びて血まみれになりながら、うめいた。そのときサークルの布団の中からまた一つの黒点が走り、壁を伝って天井の方へ消えた。それは一匹のねずみだった。

美知子は、そのときわが子をわずかな留守の間に無惨なめにあわせた敵の正体を悟った。飢えたねずみが、乳児の口元や鼻先などに付いていたミルクを舐めにやって来て、その柔らかい肌に噛み

ついたのだ。どんなに噛みついてもまったく無抵抗の相手に増長して、つきたての餅のように柔らかい肉を鋭く切り立った鑿のような歯をもってさんざんに食いちぎったのである。それに対して梢は逃れることができない。死に至る蹂躙をうけながら、幼な児はどんな思いで帰らぬ母の姿を探したことか。

古い家だったので、前からねずみが住みついていた。しかし夜中、天井裏を走りまわる気配があるだけで、まさかこんな凶暴な振舞いに出ようとはおもってもいなかった。

時折り、朝起きてみると台所に捨てた生ごみが食い散らされている程度で、特に被害というほどの被害は受けていなかったので、ねずみに対する警戒はまったく施していなかったのである。

半狂乱になった美知子は血だらけのわが子をかかえて表へ飛び出した。救急車を呼ぶ知恵も出ない。

「だれか、救けて！」

ボロボロの肉塊のような赤ん坊をかかえて泣き叫んでいる彼女を、通りすがりの人間が驚いて取り囲んだ。近所の者の通報で、救急車が呼ばれ、母子ともども救急病院へ運ばれた。だが手当ての甲斐もなく、子供は病院へかつぎ込まれて間もなく出血多量で死んでしまった。

そこへ一日の勤めを終えて、有田が帰って来た。彼は、突然降って湧いた悲報を信じられなかった。

「嘘だ！　悪い冗談は止めろ」

彼は、その悲報をもたらした親切な近所の人間の胸ぐらをつかんだ。それを残酷な現実であると悟ったとき、彼は自分を失った。

朝、家を出るときあんなにも元気で、可愛いい横暴を振っていたわが家の小さな暴君が、夕方帰宅すると、一個のくず肉の塊のようにされている。

なぜだ！　なぜこんなめにあわなければならんのだ。なにも悪いことをしないのに、どうして自分たち一家だけがこんなひどいめにあわされるのだ。自分たちは、社会の片隅に、善良な小市民として、ただひたすら真面目に誠実に生きてきた。いったい、何の罰だというのか？　――

茫然たる自失の中に、沸々と怒りが煮えてきた。

「あなた方はまだ若い。亡くなられたお子さんは可哀想だが、どんなに嘆き悲しんでも、死んだお子さんが生き返るわけではない。それよりも、一日も早くこの打撃から立ち直って、また元気なお子さんを産んでください」

医者は、彼らを励まそうとして言った。

――何を言いやがる――と有田は胸の中で反駁した。新しい子を産んでも、死んだ子は返って来ない。親にしてみれば、同じ子供でなければならないのだ。これから一打の子供をつくったとしても、ねずみに殺された梢は戻って来ない。他人の子供だから、そんな底のない慰めを言えるのだ。

だが、梢の死は、医者の責任ではない。責任は、ねずみの跳梁する部屋の中に身動きできない乳幼児を一人放置していった母親にある。

我に返った有田の怒りは、妻に向けられた。

「おまえが子供を放り出して買い物なんかに行くからいけないのだ」

「あなた、ごめんなさい」

美知子は泣いてあやまった。だがどんなにあやまったところで許される筋合いのものではなかっ

た。彼女自身、夫に責められる前に、厳しく自分自身を責めていた。
この場合、夫婦が負った深い手傷を手当てするものは、寛容ではなく、忘却であった。時間をかけた忘却だけが、抉られた心の傷の出血を止め、かさぶたをかけてくれる。
だが、有田に忘却は決して訪れなかった。むしろ時間が経過すればするほど、傷は深くなり、出血は多くなった。有田は忘れる努力をしようとしなかった。初めから忘れることを頑なに拒否していた。
したがって、夫婦の間に割りつけられた溝は、いつまで経っても埋められなかった。愛が冷えたのではない。愛を支える礎石が突き崩され、新たな礎石を築こうとしないまま、支えを失った愛は、根本を失った樹木のように立ち枯れていった。
「私たち、別れたほうがいいみたいね」
美知子がとうとう言いだした。どちらの胸にもそのおもいは萌していたのだが、たがいに言いだしかねていたのである。
二人いっしょにいるかぎり、新たな建設がまったくない。梢の想い出にしがみついて、夫婦してたがいの傷をかきむしり合っている。
「そのようだな」
美知子が言いだしてくれたので、有田は救われたようにうなずいた。憎み合って別れるのではなかった。愛は立ち枯れてはいるが、昔の形のまま、形骸を残している。死んだ子の亡霊から逃れるためには別れる以外にないのである。
「別れた後、どうするつもりだ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.